

まちを明るく元気にして 孤立している人をなくそう！

特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋 [大阪府大阪市]

テーマ

**生活保護受給者の地域貢献活動参加
および生きがいづくりプログラム**

活動の概要

生活保護受給者等に、地域の歴史や地理を学ぶ会や夜回り活動にボランティアとして参加してもらったり、イベントに関与してもらうなど社会参加の場づくりを模索した。

設立年月 2004年10月

メンバー数 正会員18人（うち役員8人）、監事1人

代表者名 山田 假奈代

連絡先

〒557-0001 大阪府大阪市西成区山王1-15-11

特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋

岡本 マサヒロ

tel 06-6636-1612

fax 06-6636-1612

e-mail info@cocoroom.org

URL <http://www.cocoroom.org>

わたしたちについて

インフォショップ・カフェ ココルームとカマン！メディアセンターを大阪西成区の通称釜ヶ崎の商店街で運営。「表現」を通して、他者とのつながりの回路や接続点を認めあい、社会や地域の問題解決のきっかけをつくる。

活動に至った理由や背景

当法人が活動拠点をおく大阪市西成区、通称釜ヶ崎（あいりん地区）は、日雇い労働者・野宿者のまちとして知られ、メディアでは貧困や暴動などネガティブなイメージで報道されることが多い。そのため地域住民と労働者・野宿者とのあいだに分断がある。

近年では日雇い労働の減少がすすみ、生活保護受給者が住民の約3分の1を占めている。そこに、生活保護受給者の孤独や孤立につけ込む「貧困ビジネス」と呼ばれる、ビジネスも生まれてきた（ただし、貧困ビジネスとそうでないビジネスとの線引きはとても難しい）。

生活保護受給者が増加したこと、ドヤ（簡易宿泊所）は福祉マンションやサポートハウスに姿を変えているが、三畳一間の部屋が多いのが実情である。釜ヶ崎に住むほとんどの人々は地元の人間ではなく、失業などから仕事を求めたり、何らかの事情があつて他の地方から流れ住んでいる独居男性である。飯場（工事現場）に何年間も住んで働いている労働者も多いことから、地域や人々の結びつきは希薄なのが現状である。

こうした背景から、釜ヶ崎地域の生活保護受給者は孤立しがちで、生活に生きがいを見出せないことが多い。その結果、精神的に不安定となり、不規則な生活リズムやアルコールへの依存などが問題となつている。

わたしたちはこれまで、地域のさまざまな人／組織とつながりを日常的に紡いてきたため、「貧困ビジネス」が流行するなかで、このことを事業というかたちで表すこととした。また、夜回りをしてみると、野宿者の数は減っているが、野宿をつづけている人、あらたに野宿をはじめた人もいることがわかった。野宿の問題を個人の問題とせず、みんなで考える機会とするために、夜回りを継続して行うこととした。



アウトリーチカフェ

サポーティブハウス「おはな」でカフェを開催。地域に暮らす生活保護受給者や労働者がボランティアで参加。ひきこもりがちなおじさんが、なにげない会話を楽しんでいたのが印象深く、きっかけがなければ、誰とも話せない生活になりがちなのだとわかる。

「むすび」は生活保護受給者の有志によるグループで、釜ヶ崎で唯一、自らが自律的に活動するおじいさんたちである。平均年齢74歳（最高齢は91歳）で、野宿の経験をもつおじいさんもいて、生活保護という似たような境遇にある方たちも励まされることが多い。そうした活動がサポーティブハウスで行われたことの意味は大きいといえよう。

6月29日 ボランティア参加者: 3名、一般参加者: 40名
 7月27日 ボランティア参加者: 3名、一般参加者: 40名
 9月6日 ボランティア参加者: 4名、一般参加者: 40名
 9月21日 (紙芝居劇むすびの公演、無料散髪を開催)
 ボランティア参加者: 13名、一般参加者: 53名



アウトリーチワークショップ 音楽編

○6月11日

こどもの里WS 講師: 赤井浩（音楽家）

釜ヶ崎にあるこどもの居場所「こどもの里」に、アートワークショップの出前を行う。8月のちんどんパレードにむけて楽器を楽しむ。

子どもの参加者: 14名

大人の参加者: 6名

(施設スタッフ、大人のボランティアなどを含む)

○7月28日

山王こどもセンターWS 講師: 赤井浩（音楽家）

山王にあるこどもの居場所「山王こどもセンター」にアートワークショップの出前を行う。8月のちんどんパレードにむけて楽器を楽しむ。

子どもの参加者: 12名

大人の参加者: 7名

(施設スタッフ、大人のボランティアなどを含む)

子どもからお年寄りまで、あらゆる人びとを惹きつける魅力が、「むすび」の紙芝居にはある。歌あり踊りあり、笑いあり涙あり、ときには脱線あり。そこには、さまざまな経験を積んでこの街に来たカマのおっちゃんらの人生がある。



9月21日は釜ヶ崎にある生活保護受給者の紙芝居劇グループ「むすび」の紙芝居公演が花をそえ、理容師による「無料散髪」があり、多くの人が楽しんでくれた。



チンドン練り歩きが三角公園のステージに勢ぞろい



上：「ちゃんと目をつぶっていてね」出発前にしっかりメークアップ。
左下：思い思いの絵を描いたネブタやカラフルな神輿、みんなでつくりました。
右下：バイオリン弾きもどんどんに参入。芸達者が多いのもこの街の特徴。

○8月12日

釜ヶ崎なつまつりちんどん（釜プラス！）

釜ヶ崎夏まつりは、40年ほど続いているまつりで、当初は運動的な色合いが強かったそうだが（機動隊の出動や逮捕などがあった）、年々地域内外の人が集うまつりとなっている。団体による屋台（野宿の方には事前に無料券が配布される）、相撲大会、スイカわりなど、昭和のにおいが漂う。飯場仕事からもどり、里帰りのできない労働者なども集う。釜ヶ崎で亡くなれた方の名前をよみあげ、黙祷をささげる慰霊祭もあり、釜ヶ崎の夏を象徴するまつりである。

「釜ヶ崎夏まつりちんどん」は、夏まつりを告知するパレードだ。当法人が企画し、2回目の開催となった。事前のワークショップを子どもの施設で行うことによって、子どもたちのモチベーションを高め、参加を促す機会となつた。

パレード当日は、思い思いに仮装やフェイスペイ

ントをほどこした子どもたちと音楽家たちが、約2時間のあいだ「聖者の行進」を演奏しながら釜ヶ崎周辺を練り歩く。子どもたちがまちの人たちに「おまつりに来てください」とはにかみながら500部以上のちらしを手渡して、宣伝を行つた。手渡された人々もほほえみながら「えらいなあ！」「がんばりや！」「まつり楽しみやな！」と子どもたちにエールをおくつた。

ちんどんパレードには、釜ヶ崎在住の人や釜ヶ崎にほとんどなじみのない若い学生、ミュージシャンなど、内外のさまざまな人々が参加。はじめて釜ヶ崎に来た人もいる。「貧困」や「暴動」などというネガティブなことばで語られがちな釜ヶ崎に、このようなにぎやかで楽しくパワフルな面があるということを体感することができ、近隣の人にも釜ヶ崎をアピールできたと感じる。

参加者：70名、セキュリティスタッフ6名



アウトーチワークショップ 地理学編

講師：原口剛（地理学者）

「自分のかかわったこの地域やひとびとを再確認し、検証する」

よく見知った風景の、現在・50年前・100年前の写真をプロジェクターで見比べながら、地域の歴史やまちに住む高齢者がたどってきたであろう歴史、そして自分たちが次の歴史を作つてゆく当事者であることに思いを馳せる。写真は、大阪市立大学に寄贈されたもので、1960年代からあいりんセンターに勤めている職員が撮影した2,000枚。

モノクロの写真からは、昭和の釜ヶ崎のまちの様子がよくわかり、子どもの姿もみられた。いまだ同じ場所に同じ看板や店があつたりして、子どもたちは「ここ、知ってる！」と歓声をあげる。このようなワークショップに対して、子どもたちや児童施設のスタッフから「アンコール」が出たことが印象深い。

9月24日 参加者：12名、9月30日 参加者：13名、
10月8日 参加者：11名 *参加者=子ども

○まちあるき勉強会

講師：平川隆啓（大阪市立大学都市研究プラザ研究員）

「釜ヶ崎、という名前や既製の知識のみでこのまちを認識せず、実際に地域のいろいろな人とふれあいながらまちを体感する」ということをテーマに、まち歩きと勉強会を行つた。ワークショップ地理学編もそうだが、専門性のたかい人のファシリテートによって、見慣れているまちや暮らしがことばになって届くときに、ゆたかな学びとなる。

まち歩きには地域内外の人が参加し、講師の言葉だけでなく、元労働者で現在は生活保護受給者が自ら語る釜ヶ崎についてのことばは、とても説得力のあるものであった。

今回語り部となつた人も健康や生活に問題をかかえているが、他者に語りかけることによって、回復するプロセスに重なり、相乗的な効果があるだろう（もっとも評価の難しいところであるが）。地域に拠点を持ち、活動をつづけるわたしたちも、ささやかにゆるやかに並走できればよいと思っている）。

10月23日 参加者：6名、11月6日 参加者：7名
12月29日 参加者：15名

夜回り活動

山王地区を中心に月一回、参加者とともに約15食～20食のおむすびを作り、飴や果物、お茶（ペットボトルを再利用）を野宿者に配る。多くの野宿者の方が「どうもありがとう！」「雨やのにすみません。」とねぎらいの言葉をかけてくれる。しかし、食べ物を配ることが野宿の恒常化につながるという声もあり、実際に商売を営む人から罵声をあびせられたこともある。けれども、野宿という問題をみんなで考えていくことが重要だと考え、当法人ではずっと継続している。もちろんすぐに答えのできる話ではないが、実際に寒い冬や暑い夏、雨の夜などを少しでも体感して、考える機会としたい。この活動は、カマン！メディアセンターのスペースに季節にふさわしいものを展示し、季節をたのしんでもらう呼びかけを行う「釜ヶ崎まつりばなし」というプロジェクトに発展している。三月はひな祭りを飾り、三月下旬からは道行く人に、おおきな紙に桜の花びらを貼ってもらっている。

調査報告書「釜ヶ崎 暮らしと居場所」の作成

釜ヶ崎で暮らす／関わる5人の居場所についての聞き取り調査、三つのコラム、ふたつの論考、釜ヶ崎用語集を掲載（A5版、P47、800部）。

釜ヶ崎というまちで暮らすのは、85%男性だが、女性もいる。今回は釜ヶ崎で暮らす女性（サポートハウス「おはな」に暮らす）にも聞き取りを行った。日雇い労働者から生活保護にかわり、就労にも挑戦している男性、単身の年金生活者、福祉マンションで働く女性、生活保護受給者「むすび」のマネージャーの女性など、さまざまな立ち場の方に聞き取りをお願いした。異なる立ち場・視点から、釜ヶ崎の暮らしや居場所を考えてみるとことによって、編み目のように関係性が織りなされていることがわかる。

論考では、少子高齢化社会の日本の直近の未来の姿として存在する釜ヶ崎を、「コレクティブタウン」ということで表現し、いかにしてこのまちで暮らし、生きていくかが考察されている。

データは当法人のサイトでダウンロードできるようになっており、手に入れてもらいやすくした。ネガティブに報道されがちな釜ヶ崎で、研究者のための研究でもなく、ローカルな情報を社会に発信していくことの重要性を感じている。

成果と課題

◎当プログラムでは、生活保護受給者や地域の労働者が、地域の子どもの施設や生活保護受給者の高齢者施設で、継続的にワークショップボランティアとして参加することにより自尊感情をとりもどし、社会参加や地域のコミュニティをつなぎ、築くことを目的としている。そのため、当事業ではさまざまなアプローチ（アウトリーチカフェ、アウトリーチワークショップ、勉強会、まちあるき、夜回り、調査報告書作成など）を試みた。

◎地域のサポートハウスでカフェ、子どもの施設でのワークショップ、夜回り活動、まちあるきなどに、これまでココルームの活動に関わっていた生活保護受給者や労働者が参加してくれた。新規の参加がなかつたのは残念だが、こういう活動に参加を促すのは、信頼関係なくしてできないことの証左でもある。地道な日々の関わりが大切であることを痛感した。

◎子どもたちは、ココルームのプログラムを楽しみにしてくれていて、スタッフや参加した大人たちに道ですれちがったときなどには、「ココルーム！」と声をかけてくれたりする。

◎他地域の参加者をつのり、夜回りを月に一回行った。貧困の問題を個人の問題とせず、社会全体の問題であることを理解し、貧困問題を地域の視点から見つめ直し、シェアリングするためである。わたしたちの拠点（インフォショップ・カフェ ココルーム、カマン！メディアセンター）を毎日何度も訪れる生活保護受給者のAさんが、みんなで話をしているときに、自身が野宿生活をしていたことを語りだすこともあった。Aさんがそういったことを語ることはこれまでなく、関係性を築いてきたことによって生まれた時間であった。これは複雑な野宿の心情を元当事者から聞ける機会となつた。

また、サポートハウスの経営者などを招いて勉強会を行い、よりよい地域社会のありかたや、生活保護受給者が社会参加に必要となる周囲の理解や環境などを話し合つた。

◎3月に東日本大震災が起り、疎開者が当地域に訪れるようになった。ココルームではサポートハウスに親子を紹介し、しばらく無償で泊めてもらえることになった。疎開者の子どもを子どもの施設に案内するなど、連携がはかれた。こういった連携は日頃のネットワーク、関係から行えるものであると考える。



6月、7月に開催したこどもの里や、山王こどもセンターでのワークショップの様子。昔の通天閣のスライドやこの地域の写真を熱心に見る子どもたち。

◎このまちで暮らす人々に「暮らし／居場所」をテーマに聞き取りをして作った冊子「釜ヶ崎　暮らしと居場所」は、釜ヶ崎コレクティブラウンをみいだす一端となつた。日頃よく話をしている人たちではあるが、住まいを訪れ、じっくりと話を聞くのは貴重な機会となつた。

◎さまざまなプロジェクトを実施した本事業がまさに交差しながら、まちづくりにつながっていると実感する。震災をうけたこれからの日本では、地域や人々がどういったところからを発揮するかが、今後も問われている。ほんとうに地道な活動やつながりを大切にしながら、地域と社会をつなぎ、今後も地域での活動と横断的活動をていねいに行つていただきたい。

◎課題としては、受益者負担がほとんどみこめない貧困地域のために、事業の継続を今後どのようにつづけていくか、という点に尽きる。政策提言を行うような評価の手法の確立や調査が必要であると考える。



三畳一間の部屋で独りテレビを見て毎日を過ごす者も少なくない。中には一週間以上、誰とも会話をしないという者もいるというこの街。他者と出会い、会話ができる場所の存在が大事である。

エピソード

担当していたスタッフの退職により、事業自体が不安定な状態になったことは想定外であった。組織内の人間関係の難しさをのりこえ、事業はなんとか継続でき、また報告書作成については貴財団から励まされ、スロースタートではあったが、あらたなスタッフたちとともに聞き取り調査に動き出した。

ココルームという「場」を持っていたことで日常的な関係が築かれていたことや、当地域で活動してきた実績等により、比較的スムーズに多様な5人にお話をうかがうことができた。室内まで入れていただくのは信頼関係がないとなかなかできないことであったが、それでも丁寧に関係づくりをこころがけ、お部屋まで伺うことができた。



今後の予定

「釜ヶ崎　暮らしと居場所」を発行するにあたって、「ココルーム実験双書」を新設した。メディアからは見えてこない釜ヶ崎の暮らしや、釜ヶ崎の人々の生き方に焦点をあて、冊子=メディアを作り、情報発信を行つていただきたい。当法人のカフェとメディアセンターが、ささやかな居場所となっているために、現場は毎日のことで手一杯であるが、あらためて聞き取りを行つたり、言説にたちあげ、発信することもあわせて行っていくことが重要ととらえている。

夜回り活動においては、声かけやおむすびを配る、みんなで考える、ということから発展して、商店街にある当法人のカマン! メディアセンターのスペースで季節ごとの展示を行つことにした。野宿の方々をお誘いすることによって、ささやかながら「つながりづくり」をつづけていく。野宿からの脱出はきっかけが重要であり、地域のNPOとして地道な活動をつづけていきたい。

アウトリーチカフェを行つた「サポートハウスおはな」では、3月11日以降、ココルームにやってきた東日本大震災の疎開者の受け入れに協力していただいている。今後ますます増えるとおもわれる疎開者／避難者／流入者が釜ヶ崎で元気に過ごせるように、連携をはかり、ネットワークを強化し、自分たちのできることを増やしていきたい。

さっそく、当法人に関わる人々（地域の労働者・生活保護受給者、釜ヶ崎で活動する人、働く人、地域外の若者たちなど）と「釜つぶKAMAPづくり」を企画しており、できあがった地図をホテルのフロントにおいてもらえるようにすすめていく。

「釜は50年間避難所みたいなまちやからな」と笑っている地域である。そこには他にない資源があり、それらを最大限に活用することによって、震災復興に少しでも役立て、釜ヶ崎の魅力を再発見できる機会ととらえたい。そして、これから社会づくりにおいて大切なこと、つながりや資本主義社会のつぎを考えること、他者とわかちあうことなどをともに学んでいきたい。



釜ヶ崎が活気を帯びていた1970年に設立された「あいりん総合センター」。日雇い仕事の数も減少し、現在では生活保護受給者の数が増加した。日雇い労働者、生活保護受給者、野宿をしながらアルミ缶集めで生計をたてる人など、この街に暮らす人びとが集まるセンターに、子どもの歓声とアフリカンドラムの音が響きわたる。